

楽しく古典を学ぶための

指導法



熊本市立湖東中学校教諭

田代 洋子

これまでの古典の授業を振り返ってみると、生徒は古文の朗読が好きである。歴史的仮名遣いと昔の古い言い回しを習得すれば、喜んで朗読をする。したがって、古文に読み仮名や傍注がついていると生徒は取りつきやすい。読み慣れてくると、古文や漢文のリズムを好きになる生徒も多くいる。しかし、古典学習の限られた授業時間だけで古典に十分親しませるのは困難なこともある。さらに、授業を離れると生徒にとって古典は再び遠い存在になってしまっていることが多い。

そこで、古典の学習後も古典への興味・関心が持続し、自ら古典を読もうとするような態度を育てたいと思った。そのためには「古典は楽しい、おもしろい」という古典との出会いや「古典は今の自分たちの生活にも相通

じるものがあり、現代にも生きていく」という発見を生徒にもたせると効果があると考え、実践してみた。

1 『竹取物語』(一年)

日本昔話題名あてクイズ

教師 今からみんなが知っている物語を昔の言葉を使ってお話ししますので、その話の題名がわかった人は挙手をして答えてください。今の言葉と違うのでよく聞いてください。途中でわかった人も合図をするまではしっかりと聞いてください。では、始めます。

「今は昔、翁と姫ありけり。翁は野山にまじりて柴をとりてぞありける。姫は洗いものをせむとて川へいでにけり。ある日の夕暮れ、姫のもとへ大きな桃の実なむ流れ来たる。」

はい、「ここまでわかった人。(答えは「桃太郎」)

という形でいくつか物語を替えて繰り返し、古文を聞くことから慣れさせる。生徒から答えは容易に出るし、次の話を聞くころ一心に耳を傾ける。よく知られている昔話を教師が古文に直して語るとオリジナルができて、指導するほうも楽しい。

物語例 『御伽草子』などを参考に筆者が作った。(

・昔、丹後の国に浦島という者はべりしに、その子に

太郎と申して年の齡二十四、五の男ありけり。明け暮れ海のうろくづを取りて、父母を養ひけるが、ある

日のつれづれに釣をせんといでにけり。(浦島太郎)

・昔、翁と姫ありけり。子供のなれば犬一匹ばかりを「白」と名づけて、まことの子のやつに、いつくしみ育てあり。ある日、翁くわを背おひて裏の畑に出でにけり。そこへ犬かけ寄りて土を掻きつつ示したり。あやしがりてくわを入れてみるに、大判、小判の金子あまたいでたりけり。(花咲じいさん)

そのほか、「こぶとりじいさん」「ものぐさ太郎」などもおもしろい。最後に「竹取物語」の冒頭部分「今は昔、竹取の翁といふもの……」と入っていくと、昔の言い方もだいたいわかるという安心感が生まれる。また古文で自分も語ってみたいという思いも喚起されて、楽しく古典の学習に入ることができた。

かぐや姫に注目し、発見する

冒頭の口語訳を読んで、よく知っている「かぐや姫物語」の中で新たな発見をし、興味をもたせる試みである。「かぐや姫はどのくらい大ききだったのだからか。」という問いで、かぐや姫に注目させる。本文から三寸(約九センチメートル)とわかる。そこでほぼ同じくらしい人形を準備し、手のひらにのせて生徒に提示する。

その小ささに初めて気づき、実感する生徒が多かった。翁はこの小さなかぐや姫をどつやつて運ぶのが実演させると、生徒は夢中になる。何か今まで気づかなかったことを発見しようという気持ちで本文をしっかりと読めるようになる。その後、生徒から次のような質問が出された。翁は根元が光っている竹を切るとき、かぐや姫を傷つけないようにどつやつて竹の切る部分を決めたのだろうか。(実はかぐや姫が座っているのが透けて見えていたのだということになった。)

・三寸のかぐや姫が三か月で一人前の娘(大人)になるなんて、これはSF(空想科学物語)だ。昔の人も空想するのは同じだ。

こんな不思議や発見に驚きながら、古文も楽しく読めた。昔話に改めて興味をもち直した生徒もいた。

2 『平家物語』(二年)

「扇的」の実況放送を利用する

教科書の発展的な課題学習として出ている「扇的」の実況放送を読み込みの導入に使用してみた。指導書(下巻p53~54)のシナリオ例を参考に、テープにとって生徒に聞かせた。(教師が読んでもよい。)

その後、実況内容にあたる古文「ころは二月十八日

の西の刻ばかりのことなるに「……。」と読ませていくと、先の実況放送で頭の中に場面がありありと浮かんでいるので、古文もわかりやすく、朗読にも力が入った。なお、周知のことではあるが、「扇的」はぜひ群読を勧めたい。(指導書下巻p50～51・53参照)群読の達成感から『平家物語』を好きになった生徒は多い。

生活のテンポの違いに注目し、発見する

『平家物語』を好きになつたら琵琶法師の語りを聞かせ、あの驚くべき悠長さ(ゆっくりさ)で当時と今の時代の生活のテンポの違いに注目させる。現代の私たちが、いかに慌ただしく生きているかを実感させる。戦いの最中に扇的のような優雅な企てができるのもこんなゆっくりした生活のテンポから生まれたものかと考えさせられる。しかし、この悠長さの中に、現代の戦争の殺戮にも通じる残酷さもあり、当時これを嘆く人もあつたことに気づかせ、社会状況を考える契機を与えておくと、古典学習が後々まで印象深いものになるよつた。

3 『おくのほそ道』(三年)

『おくのほそ道』は、月日の流れは旅であり、人生もまた旅のようなものであるという、中学生にはまだまだ実感しにくい大人の人生観の古文と出会う。現代との接

自分のメモができたら、時代は江戸へとさかのぼり、「芭蕉の旅支度や旅立ちの思いを調べてみよう」と冒頭の部分に入る。
まず、口語訳を読ませて次のメモを記入し、生徒自身のメモと比較させ、共通点や相違点を知って、古文を読んでいた。

芭蕉の旅支度(東北へ)春	
衣服	股引の破れを繕う。 わらじ・道中笠のひもを新しく付け替える。
持ち物	布袋・金子(お金)・和タオル・杖 水入れ(竹筒)・墨・筆・紙
体調を整える	三里に灸をすえる。 (足を丈夫にするため)
見物したい所	白河の関・松島にかかる月 (北上川・平泉)
気持ち・その他	そわそわと落ち着かない。 何も手につかない。 帰れないかもしれないので住んでいた家を人に譲った。

(注)衣類や持ち物は教科書のカラーページやさし絵にも注目させる。

点を見つけたら、芭蕉の思いに近づいたりする工夫をして楽しませよつと考えた。

東北旅行の旅支度を導入として

教師 みなさんはこれから「おくのほそ道紀行」と銘打つた東北旅行に出けると想像してください。一週間後には出発です。さて、旅行の準備として必要なものや、旅立ちの前の気持ちを考えてメモしましょつ。

わたしの旅支度(東北へ)春	
衣服	Tシャツ・ジャンパー・ジーンズ 履き慣れた靴・厚手の靴下・帽子
持ち物	リュック・カメラ・お金・タオル ティッシュ・洗面用具・筆記用具 メモ帳・ガイドブック(地図)
体調を整える	病気やけがをしないようにしておく。 早寝・早起きをして体調をよくしておく。
見物したい所	日光東照宮・利根川・会津・五色沼 猪苗代湖・松島・平泉(中尊寺)
気持ち・その他	旅行が楽しみで、わくわく、そわそわする。 交通安全に気をつける。 盗難に気をつける。

(注)新聞や旅行会社の東北の旅のちらしやパンフレットを持参させるとよい。

このよつに、旅に出る直前のわくわく、そわそわした気持ちの共通点を知り、しかし、現代とは違う旅の厳しさも想像できて、興味・関心はかなり持続するし、時代を越えて同じ旅行者として芭蕉を身近に感じた生徒もいた。

平泉に落ちていく義経と弁慶の話を読む

教科書の「伝統芸能の世界」(三年)の写真のページ(p58)を利用して「勸進帳」の話や古文の学習の前に生徒に語つた。これも興味・関心をもたせるのに効果があつた。有名な安宅の関の話である。義経と弁慶の主従愛の深さや富樫の温情に心を動かす生徒は多く、平泉での弁慶の立往生、老兵兼房のすさまじい最期(指導書上巻p111参照)まで語り聞かせておくことで、難しい古文ではあるが生徒は興味深く読むことができた。

教師が古典文学の名場面や名句について学習を深めておくことも、また歌舞伎、能、狂言などの実体験(鑑賞で十分)をしておくことも、生徒を楽しみ古典学習へ導く契機になることがある。

はるかな時を越えて、古典の中の人々と自分が交流できるよつおもしろさを味わつたとき、生徒の中で古典は生きてくると思つ。古典を楽しむ学ぶよつで、自ら古典に親しむよつという心を育てていきたいと思つ。